



堀辰雄 著

風立ちぬ
美しい村

A4用紙で印刷すると、実寸サイズがご確認いただけます。
※倍率100%の場合

風立 ちぬ

この作品には不適切と思われる表現がありますが、
作品の文化的な価値を考慮し原文のまま掲載いたしました。

それらの夏の日々、一面に薄すすきの生い茂った草原の中で、お前が立ったまま熱心に絵を描いていると、私はいつもその傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たえていたものだった。そうして夕方になって、お前が仕事をすませて私のそばに來ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合つたまま、遙か彼方の、緑だけ茜色あかねいろを帯びた入道雲のむくむくした塊りに覆われている地平線の方を眺めやっていたものだった。ようやく暮れようとしかけているその地平線から、反対に何物かが生れて來つつあるかのように……

そんな日の或る午後、(それはもう秋近い日だった) 私達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白樺の木蔭に寝そべって果物を齧かじっていた。砂のような雲が空をさらさらと流れていた。そのとき不意に、何処からともなく風が立った。私達の頭の上では、木の葉の間からちらつと覗のぞいている藍色あいいろが伸びたり縮んだりした。それと殆んど同時に、草むらの中に何かがぱつたりと倒れる物音を私達は耳にした。それは私達がそこに置きっぱなしにしてあつた絵が、画架と共に、倒れた音らしかった。すぐ立ち上つて行こうとするお前を、私は、いまの一瞬の何物をも失うまいとするかのように無理に引き留めて、私のそばから離さないでいた。お前は私のするがままにさせていた。

風立ちぬ、いざ生きめやも。

5 風立ちぬ

ふと口を衝ついて出て來たそんな詩句を、私は私に靠もたれているお前の肩に手をかけながら、口の裡うちで繰り返していた。それからやつとお前は私を振りほどいて立ち上つて行つた。まだよく乾いてはいなかったカンヰワスは、その間に、一めん草の葉をこびつかせてしまつていた。それを再び画架に立て直し、パレット・ナ

イフでそんな草の葉を除りにくそうにしながら、

「まあ！ こんなところを、もしお父様にでも見つかったら……」

お前は私の方をふり向いて、なんだか曖昧な微笑をした。

「もう二三日したらお父様がいらっしやるわ」

或る朝のこと、私達が森の中をさまよっているとき、突然お前がそう言い出した。私はなんだか不満そうに黙っていた。するとお前は、そういう私の方を見ながら、すこし噎れたような声で再び口をきいた。

「そうしたらもう、こんな散歩も出来なくなるわね」

「どんな散歩だって、しようと思えば出来るさ」

私はまだ不満らしく、お前のいくぶん気づかわしそうな視線を自分の上に感じながら、しかしそれよりもっと、私達の頭上の梢が何んとはなしにざわめいているのに気を奪られていっているような様子をしていた。

「お父様がなかなか私を離して下さらないわ」

私はとうとう焦れたいとでも云うような目つきで、お前の方を見返した。

「じゃあ、僕達はもうこれでお別れだと云うのかい？」

「だって仕方がないじゃないの」

そう言ってお前はいかにも諦め切ったように、私につとめて微笑んで見せようとした。ああ、そのときのお前の顔色の、そしてその唇の色までも、何んと蒼ざめていたことったら！

「どうしてこんなに変わっちゃったんだろうなあ。あんなに私に何もかも任せ切っていたように見えたのに……」と私は考えあぐねたような恰好で、だんだん裸根のごろごろし出して来た狭い山径を、お前をすこし先きにやりながら、いかにも歩きにくそうに歩いて行つた。そこいらはもうだいぶ木立が深いと見え、空気はひえびえとしていた。ところどころに小さな沢が食いこんだりしていた。突然、私の頭の中にこんな考えが閃いた。お前は、偶然出逢つた私のような者に

もあんなに従順だったように、いや、もつともつと、お前の父や、それからまたそういう父をも数に入れたお前のすべてを絶えず支配しているものに、素直に身を任せ切っているのではないだろうか？ ……「節子！　そういうお前であるのなら、私はお前がもつともつと好きになるだろう。私がもつとしつかりと生活の見透しがつくようになったら、どうしたってお前を貰いに行くから、それまではお父さんの許もとに今のままのお前でいい……」そんなことを私は自分自身にだけ言い聞かせながら、しかしお前の同意を求めでもするかのように、いきなりお前の手をとった。お前はその手を私にとられるがままにさせていた。それから私達はそうして手を組んだまま、一つの沢の前に立ち止まりながら、押し黙って、私達の足許に深く食いこんでいる小さな沢のずっと底の、下生の羊歯したばえなどの上まだで、日の光が数知れず枝をさしかわしている低い灌木かんぼくの隙間をようやくのことど潜り抜けながら、斑まだらに落ちていて、そんな木洩れ日がそこまで届くうちに殆んどあるかないか位になつていゝる微風にちらちらと揺れ動いているのを、何か切ないような気持で見つめていた。

それから二三日した或る夕方、私は食堂で、お前がお前を迎えに来た父と食事を共にしているのを見出した。お前は私の方にぎごちなさそうに背中を向けていた。父の側にいることがお前に殆んど無意識的に取らせているにちがいない様子や動作は、私にはお前をついぞ見かけたこともないような若い娘のように感じさせた。

「たとい私はその名を呼んだにしたつて……」と私は一人でつぶやいた。「あいつは平気でこつちを見向きもしないだろう。まるでもう私の呼んだものではないかのように……」

その晩、私は一人でつまらなそうに出かけて行つた散歩からかえつて来てからも、しばらくホテルの人けのない庭の中をぶらぶらしていた。山百合が匂つていた。私はホテルの窓がまだ二つ三つあかりを洩らしているのをぼんやりと見つめ